

<第100回 国際ARCセミナー(仙海義之氏)レビュー>

小林一三 —社会事業・文化事業をビジネスの両輪に

山本 睦月(立命館大学大学院文学研究科)

E-mail gr0517fi@ed.ritsumei.ac.jp

1. 概要

本稿は、2022年4月27日に行われた「第100回国際ARCセミナー」における仙海義之氏¹⁾(以下敬称略す)の講演について報告するものである。本講演では、実業家であり文化人でもあった小林一三²⁾という人物がなぜ社会事業と文化事業を共に広めることになったのか、その実態についての考察を述べられた。以下、その内容に従って紹介する。

2. 実業家×文化人を捉える3つの視点

実業家であり文化人である、といった相反する特質をもつ小林について他の実業家や文化人らと相対化するための視点として、本講演では以下の3点が提示された。

1. 個人的な文化活動
2. ビジネスとしての文化事業
3. 公共的な文化支援

以降、この3点を軸として小林がいかんにして実業家であり文化人であるかを考察された。

2-1. 個人的な文化活動

個人的な文化活動としては、まず美術との関係性が挙げられる。山梨で生まれた小林は、上京し慶応義塾大を卒業した後に三井銀行に勤める。同時期から、「新しい絵画³⁾」である「新画(しんが)」のコレクションを始めた。特に、寺崎広業、川合玉堂、鈴木華邨の3人を最真にし、彼らを応援するために「鼎会」を設立したほどである。

小林が新画を収集した理由は未だはっきりと解明されていない。仙海は、小林が美術品の収集を成すことよりも、むしろ美術品を通じた社交を楽しんでいたのではないかと推測する。美術品を扱う会合では必ず宴会が行われた。遊びのような側面から美術品に触れることを楽しんでいたのではないかと推測された。

小林が茶道に傾倒していた理由も、同様に多くの人々との交流を楽しんでいたものではないかと推測された。茶道を通じて交流した人物は幅広く、根津嘉一郎や松下幸之助をはじめ、松永安左エ門や五島慶太

らと茶会を行った会記が残されている。懐石料理や高級な道具などではなく、家庭や日常生活を基準に無駄のない簡易と趣味から出発したお茶人になるべきだと考え、お互いの真心を通じた交友を本意としたように、小林の茶会は茶道に親しくない人でも楽しめるような工夫が凝らされていた⁴⁾。

小林の茶道に対する考えは書にも認められる。彼は慶應義塾の学生であった頃から文芸に通じ、非常に多くの作品を世に生み出した⁵⁾。俳句に関しては生涯を通じて二、三千の句が残されており、その趣味から俳諧に関する美術品への収集へと繋がっていく。

小林の文化活動は、彼自身の創作から、やがて他の文化人らの支援へと重心を移していく。与謝野晶子ら様々な文化人らを支援するが、その背景には菊池寛との出会いや小林自らが文藝春秋社に出入りしていたことが挙げられる。こういったネットワークが様々な文化人らと知り合うきっかけになったのではないかと仙海は考える。

文化活動は阪急百貨店でも行われる。1932年には6階に古美術街、7階に洋画の画廊がそれぞれ置かれ、文化の普及に貢献した⁶⁾。特に古美術街には大阪の老舗の美術商10店を集め、それぞれの商品がショーウィンドウに値段とともに並んだ。誰もが分かりやすく購入しやすい古美術街を小林は目指したのである。同階にはお茶の流儀に拘らずに教室を開いたり茶会ができていたりするようなお茶席も設けた。駅の百貨店は様々な人が気軽に来られる場であり、小林はそれを利用して茶道・茶の湯文化を広め、誰でも楽しめるような茶道を作ろうとしたのである。

2-2. ビジネスとしての文化事業

ビジネスとしての文化事業については、小林の実業家・文化人としての特色が最も濃く現れた点だ、と仙海は語る。

小林はまず1913年に豊中運動場を開場した。ここでは、野球をはじめとする様々なスポーツ大会が行われる。現在の夏の高校野球の前身となる全国中等学校野球大会の第一・二回もこの運動場で開催された。また1937年には阪急西宮球場が開場した。阪急が所持

する野球チーム・阪急軍(後の阪急ブレーブス)のホームグラウンドであり、アメリカ・シカゴのリグレー・フィールドを参考にしたモダンな野球場であった。ここでは野球のリーグ戦の他、オフシーズンにはコンサートなども開かれた。野球場をエンターテインメント施設として運営するという小林の発想は、彼自身が野球をスポーツとしてではなく、多くの人が応援することで喜びを得るエンターテインメントの一つとして捉えていたからうまれたと仙海は考察する。

また1914年には、小林の念願でもあった宝塚少女歌劇団を創立した。日本の近代化・西洋化を意識した教育の場として宝塚音楽学校を創立し、音楽や演劇の基礎を少女たちに学ばせ演劇を行う。大阪の新聞社に支援され、徐々に人気を博し1924年には宝塚大劇場が開場。3階建てで4000人を収容する当時世界で2番目の大きさを誇る大劇場が創設された。舞台も広くなったためラインダンスなどを含めたより芸術的な公演が可能になり、また大階段が作られることによって水平方向と垂直方向の動きを用いたダイナミックで華やかな演出が可能になった⁷⁾。

小林は歌劇団のために脚本も度々執筆しており、それらをまとめた戯曲集なども出版された⁸⁾。また、彼の歌劇や芝居・演劇に関しての考えをまとめた本も出版された。

これら出版物はメディア戦略としての役割も担った。『歌劇』は1918年から今なお刊行が続く月刊誌だ。当時地方都市であった宝塚を全国に宣伝するには出版物は適しており、このメディア戦略により宝塚歌劇は全国各地に広まっていき、観客を呼んだ。また当時の生徒は13-15歳ほどの中学生であったが、雑誌では彼女たちを大人びた、ロマンチックな乙女の姿として描き、イメージ戦略も同時に行われていたと仙海はいう。

人気を博した宝塚歌劇は東上し、1934年に東京宝塚劇場が開場する。劇場は大正時代から映画が娯楽の花形として喜ばれるようになったことを受け、映画も上映できる場として開場された⁹⁾。小林はまた、東京宝塚劇場のすぐ近くに日比谷映画劇場や日本劇場も開場し、後者では入場料五十銭均一にするなど画期的な経営政策をとった。また欧米を旅した小林は、首都に文化センターをつくることを意識し、帝国劇場と東京會館を買い取る。1963年には東京宝塚劇場、日比谷映画劇場、有楽座、日本劇場、帝国劇場など日比谷一帯に小林が仕立てた劇場が立ち並び、多くの観客を迎えることになった。

2-3. 公共的な文化支援

公共的な文化支援については、小林は多くの評論を残している¹⁰⁾。特に、戦後の復興について、日本は文化国家として進みゆく道筋があるはずだと考え、各地域に個々の時代区分を代表する文化を当てはめ文化と観光をともに行うようなことを構想している¹¹⁾。その拠

点としての文化施設の重要性を説いた。

小林は評論するだけでなく自らの手で文化施設を建設していく。まず1915年には宝塚に図書室を建設した。宝塚歌劇や宝塚新温泉に来場した客人が、自由に図書を閲覧できるよう建設したものだ。これを発展させ、歌劇の公演製作の参考になるような芝居や演劇の資料を収集した宝塚文芸図書館を建設。戦後、同館を池田へと移し、池田の文化復興の拠点として現在の池田文庫を建設した¹²⁾。

また小林は美術館建設へも熱意を傾けた。宝塚に図書館を建設した当時、同じく展示会場も宝塚に設けた。しかし恒常的な美術館を建設するには至らず、戦後の池田の文化復興の一端として美術館設立の話が持ち上がる。小林は美術館建設に対し非常に熱心であった¹³⁾が、存命中に夢は叶わなかった。彼の死後、遺族らは雅俗山荘に彼のコレクションを収め、1957年10月に逸翁美術館が開館する。

3. 文化を通じて人々と交流する、そして運営へ

以上、3つの視点から小林の文化事業について述べられたが、仙海はそこに一つの共通点を見出していく。それは、小林自身、あるいは特定の誰かだけが楽しむような文化事業ではなく、文化を享受する側の目線に立ち、彼らをいかに楽しませ、彼らの視点を取り入れて文化施設を運営していくかに心を砕いていたということだ。

第一の視点からは、茶道の活動や文化人の支援を通じて多くの人と交流することを楽しんでいたとする。小林は文化を、人々と交流するためのツールとして楽しんでいたのである。第二の視点からは、野球場、劇場、映画館などの施設を全てエンターテインメントの施設として捉え、観客をいかに楽しませるかという経営戦略を持っていたと分析する。小林は文化事業の経営に心を砕いていたのだ。第三の視点からは、地域文化を大切にすべきという小林の思想が顕著に見出せると仙海は語る。

小林の文化事業は、常に多くの人々が文化を享受する方法を考える視点を持つことによって成り立ち、そのことで社会事業との結びつきを容易にした、と仙海は結論づけた。

本講演は、実業家でありながらも文化人でもあったという小林一三の実態に迫るものであった。講演の軸である3つの視点は、生涯を辿ることによって見出されたものである。彼がいかにして「文化を享受する側」に立ち物事を発想してきたのが明瞭になった。他にも実業家であり文化人でもある著名な人物は多く存在する。彼らの生涯を追い、彼らが獲得した文化活動と文化事業をつなげる視点を探りたくなかった。また彼らと小林とを比較することによって、小林の業績が明らかになるのではないかと筆者は考えた。

[注]

- 1) 逸翁美術館・小林一三記念館・池田文庫 公益財団法人阪急文化財団 理事・館長
- 2) 1873-1957. 阪急東宝グループ(現・阪急阪神東宝グループ)の創業者で、運輸業(阪急電鉄)、流通業(阪急百貨店)など社会事業のほか様々な文化事業も手広く経営した。本稿では以降小林とする。
- 3) 近代以前までの絵画と比較し、新しい絵画のことを指す。
- 4) 小林は住家であった雅俗山荘で茶会を開く際には、10席の椅子を用意し畳上と同じ視点で喫茶、拝見ができるように工夫したという。外国人や茶の湯に親しくない人々も楽しめる仕組みが作られていたと仙海は分析する。(「茶室について」小林一三記念館・阪急文化財団)
- 5) 小林の学生時代には、小説『練絲痕』が山梨日日新聞に掲載された(1890年4月)。
- 6) また百貨店では出版も行われ、1937年に創刊された雑誌『阪急美術』(阪急美術編集部)はその後『日本美術工芸』(日本美術工芸社)に名を変え700号まで出版された。いずれも、百貨店の美術部の機関紙として出版されており、小林自身も文章を掲載していた。
- 7) 劇場では岸田辰彌演出の日本初のレビュー「モン・パリ」(1927年)や白井鐵造による「パリゼット」(1930年)などが上演された。
- 8) 1937年に自らが執筆した戯曲「恋に敗れたるサムライ」の上演にあたっては(『小林一三全集 第6巻』所収)では一部監督・演出も務めた。
- 9) 小林は演劇に関しても劇場経営というものが重要であるという考えを持っていた。営利事業として観客なしには成立しないと考えていたのだ。(『小林一三全集 第2巻』「おもいつ記」より)
東京宝塚劇場が開場した際に歌劇団に小林が贈った「清く正しくうつくしく」の言葉は現在でも歌劇団のモットーとして受け継がれている。
- 10) 『小林一三全集』全7巻に所収。
- 11) 奈良博物館では飛鳥・奈良両時代を、京都美術館では源平時代を、など各地域に個々の時代区分を代表する文化を当てはめる具体例を小林はいくつも挙げている。日本歴史の絵巻物を大成することが彼の構想にはあった。(『小林一三全集 第5巻』「国土計画と観光施設」より)
- 12) 池田の文化復興と池田文庫について、小林は自身の日記(1945年9月)に池田市を全国の模範として建設したいと記し、また図書館並びに育英事業の新設は自らが行うと記していた。
- 13) 欧米から帰国した小林は、日本に一番欠けていることは美術館及び博物館が各都市の中心、あるいは公園にほとんど置かれていないことだと指摘した。また、日本では美術が公のものであるという観念が乏しいことを指摘し、私有品が公開されること、幾多の美術館が建設されることを願った。(『小林一三全集 第3巻』「雅俗三昧」より)

[参考文献]

- 立命館大学アート・リサーチセンター「第100回 国際ARCセミナー (Web 配信)」。活動報告。
<https://www.arc.ritsumeit.ac.jp/j/news/pc/013413.html> (閲覧日:2022年6月25日)